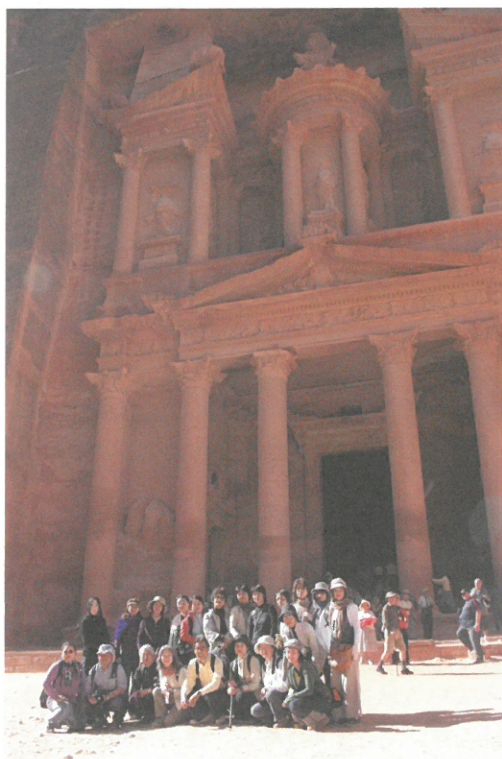


NPO JCP NEWS

No. 20 ・ 2009. 9.30

- ・ ヨルダン王国・世界遺産遺跡スタディーツアー開催報告
- ・ 伏流水 日本における人材養成の現場から 奈良大学
- ・ 書籍紹介 『水損資料を救う』
- ・ 保存修復の現場から ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵「マゼランチェスト」の保存修復プロジェクト
- ・ コラム 日本ケンタッキー・フライド・チキン株式会社所有
「カーネルサンダース像」保存事業が朝日小学生新聞で紹介されました
- ・ JCP事務局通信



エル・カズネ（ペトラ）の前にて



アムラ城（8世紀建立）内部に残る壁画

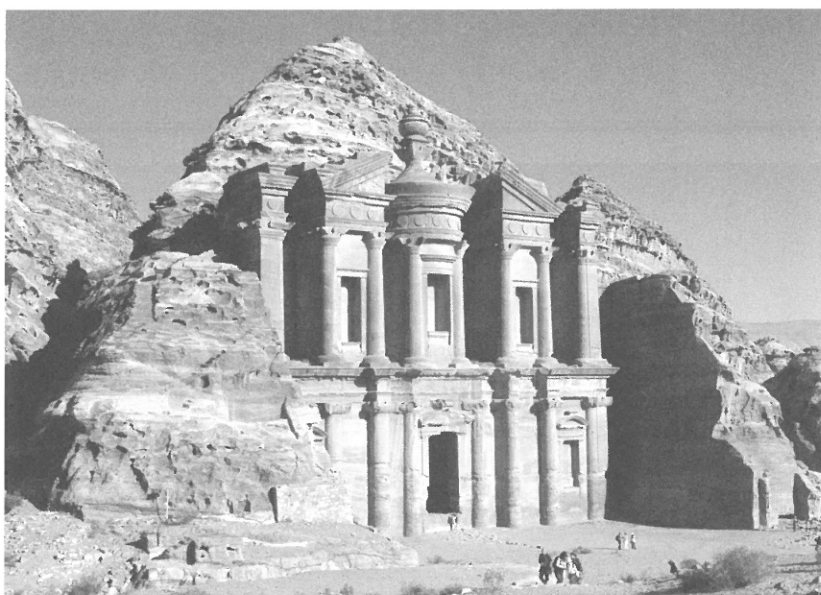


奈良大学キャンパス

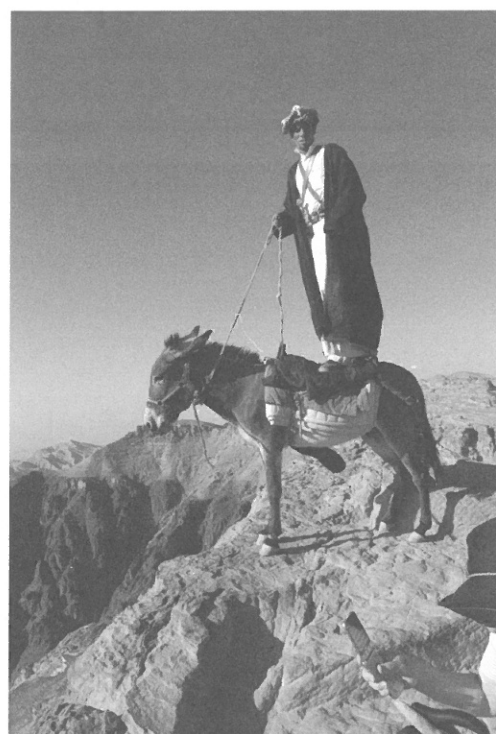
ヨルダン王国・世界遺産遺跡 スタディーツアー開催報告

2008年度のスタディーツアーは、11月22日から29日までヨルダン王国の世界遺産、遺跡を巡りました。初めての中東、イスラム圏へのツアーは、日程も今までで最長の6泊8日になりました。参加者は19名。講師、スタッフ含めて21名になりました。講師は、今年も西浦忠輝氏（文化財保存支援機構 副理事長／国土舘大学 教授）にお願いしました。「インディジョーンズ 最後の聖戦」のロケ地でおなじみの世界遺産 ペトラ遺跡、ローマ時代の都市遺跡 ジュラシュやウム・カイスなど、世界遺産、都市遺跡、古城等を訪問。ま

た、世界一海拔の低い土地、死海での浮遊体験もしました。ウム・カイスでは、西浦氏が所属する国土舘大学の研究施設、公開されていない地下水道跡も見せていただきました。案内をしていただきましたジャファー先生に厚くお礼申し上げます。また、旅行前のオリエンテーションにて講師をしてくださいました国土舘大学の松本健先生にもお礼申し上げます。今回は、参加者より井上敏氏（登録会員）と竹ノ下磨須子氏（一般会員）にツアーの感想をいただきました。



エド・デイル（ペトラ）



ペトラにて

ヨルダン・ツアーに参加して

井上 敏

NPO JCPが設立されて以来、これまでいくつかの活動に参加させていただきました。その中で最も参加させていたでいるのがスタディーツアーです。これはJCPの活動の中でも最も人気があるものの一つではないでしょうか？

これまで多くのツアーに参加させていただきましたが、今回のヨルダンは、以前のツアーに負けないう魅力でした。アンマンやウム・カイスの古代ローマの遺跡、そしてペトラ遺跡という、今回も興味深い遺跡ばかり。ペトラ遺跡はインディ・ジョーンズの映画の撮影でも使われたところで、欧米人にとってはまさに彼らが考える「アジア」-「異境」の世界なのだろうな、と思いながら見ていました。それに私がペトラ遺跡を見ながらブツブツつぶやいていたのを聞かれた参加者のうち、「デビット・ロバート」という名前を繰り返していることに気付かれた方もい

るかもしれません。デビット・ロバートはエジプトなどの古代遺跡が残っている風景を描いたイラストレーターで、このペトラ遺跡も描いています。昨夏、海外研修中のロンドンで古版画などを売っていたお店や作品集を売っていた本屋さんでよく見たものです。私にとってペトラ遺跡はロンドンでの思い出ともつながる場所でもありましたから、それを見ることができた時の感慨は入りました。またその海外研修中にローマでフォロ・ロマーノなどの「首都」の遺跡群やイギリスで古代ローマ時代の世界遺産「ハドリアヌスの防壁」も見ていましたので、アンマンなどで見たローマの遺跡群と併せると国境防備のための長城、アンマンなどのローマ時代の地方都市、首都ローマと古代ローマの遺跡を一通り見ることになり、とても興味深いものでした。



死海での浮遊体験



ウム・カイス発掘調査現場

本当にいつもJCP事務局の八木さん、松本さん、お世話さまです。また今回解説してくださった国士館大学の西浦先生、ありがとうございました。今後も魅力的な企画を楽しみにしています。今年は「敦煌」になるとか。期待しています。

ヨルダンツアーの感想

竹ノ下 須磨子

飛行機がようやく待望の目的地ヨルダンに到着した。空港からバスに乗り発車した時から、車窓からの景色に、私の目は釘付けになった。「風景の中に、植物が少ない……、樹木はないわけではないが、瀕死状態のように目に映り、地面を覆う雑草なども少ない。それに比べ、地肌が現れている面積が、なんと多いことか。これが、俗に中東というこの地域の特色なのだったと思った。しばらく走って行くと、山並みにオリーブの木が静かに生えているのを頻繁に目にする。そういえば、西洋の宗教画には、この木が登場するし、それに最近、美術館で観たイスラエル人彫刻家の展覧会にも、オリーブの樹木が作品として展示してあったことを思い出す。この木は、こちらでは身近な存在なのだと改めて実感すると、西洋美術の根源に、少し触れたようで嬉しくなった。



ジュラシュにて



ペトラに向かう車窓より

また、遺跡にも驚かされた。歴史は紀元前より始まり、石の都市、円形劇場、石の道路、井戸、水路など。ウム・カイス遺跡では、今日は特別公開だということで、地下に案内されて、梯子で降りて行った。そこには人が立って歩けるくらい大きい規模の、水のトンネルが続いていた。旅の後半に尋ねたペトラ遺跡は砂岩に彫られた遺跡だが、その巨大な遺跡群には、圧倒されるばかりであった。美しさもさることながら、道の脇には水路が走っていたことや、また、原住民だけが遺跡内での商売が許されることなどにも、興味を持った。

現在、周辺を含め、この地域は紛争が絶えない所、という一般的なイメージだけが強いが、あらゆる遺跡から、深い歴史や豊かな文明を体感した。異教徒たちが仲良く暮らす場面を描いた壁画が残っていた。クリアで吸い込まれそうなブルーの空を背景に、歴史を導いた建造物が美しさを際立たせていた。

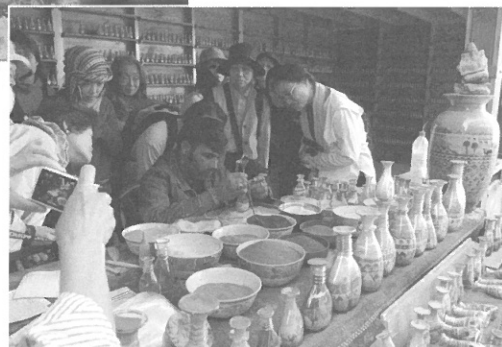
各遺跡では、修理や修復が徐々にではあるが、進んでいた。一般人から見ると立派で広大な遺跡でも、世界遺産に登録されず、また、逆に小さな遺跡でも世界遺産であったりとしていた。修理方法もひとつの要因らしい。昨今、私の地元でも、“世界遺産登録を目指して”と活動をしているので、保存のあり方について考えさせられた。

今回の旅で、最も気持ちを浮き立たせたのは、死海で泳いだことだ。遠い昔、子供の時に、雑誌で目にした不思議な現象が確認できたからだ。帰国した後に「本当に浮くの？」と尋ねられたが、浮くというよりも、沈まないと表現したほうがよい。沈もうと思ってチャレンジしたが、身体が水面で回転するばかりだった。

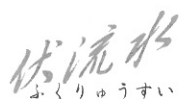
このスタディーツアーは毎年開催される。私はたびたび参加させていただいている。ガイドも分かりやすく、先生方やスタッフの皆様も優しく親切で、毎回感謝をしている。修復の現場にも入れ、そこでの専門家からの話も聞け、興味は尽きない。各国の修復事情を知ることにより、修復は、政治、経済、気候など、その他諸々の条件なども含めて、その中で方針を進められて、仕様もひとつではないことが分かってきた。自分に置き換えてみると、今までは、修復方針はこうでなければという、コチコチの考えを持っていたように思う。おかげでそのことが認識でき、これがスタディーツアーで一番学んだことかもしれない。



モザイク画作り（マタパ）



砂絵作りを見学する参加者（ペトラ）



日本における人材養成の現場から

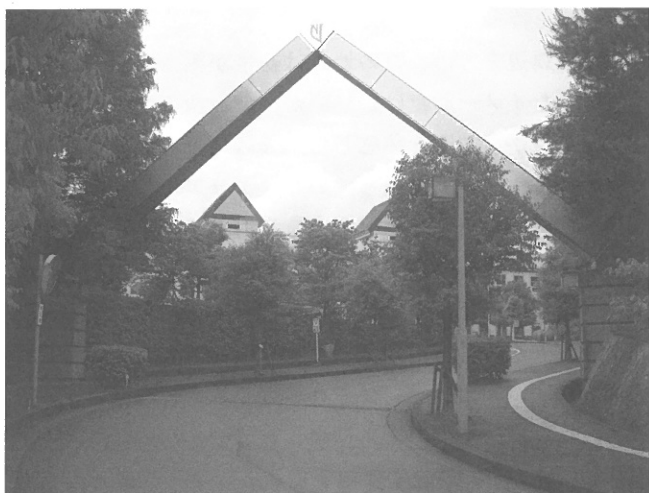
第V弾

奈良大学

文学部 文化財学科

1976年に開校した奈良大学は、今年で創立40周年を迎えます。その奈良大学に文化財学科が開設されたのは、大学創立から10年後の1986年、日本初の文化財学科の誕生でした。今でこそたくさんの大学に文化財学科は存在しますが、学科開設から30年を経た奈良大学は、間違いなくこの世界のパイオニアです。

今回は伝統が息づく奈良大学文学部・文化財学科を訪問しました。



奈良大学正面ゲート



奈良大学 西山要一先生

近鉄高の原駅から丘陵地帯の坂を登り切ると、奈良大学の特徴的なゲートが現れます。斜面をうまく利用したキャンパスからは、東には若草山から三輪山まで、西には生駒から信貴山まで、南には大和三山が遠望でき、この大学が歴史の地に抱かれていることを実感します。

保存科学研究室にお邪魔すると、西山要一教授と共に、4名の学生が出迎えてくれました。

文化財学科開設の経緯—辻村泰圓氏の思い

——まずは文化財学科の開設にいたる経緯をお聞かせ下さい。

西山先生：私はこの大学に来る前は、元興寺文化財研究所に勤務していました。その研究所の理事長で、元興寺の住職でもあった故・辻村泰圓（つじむらたいえん）氏が、奈良大学の理事長をなさっていた時期がありました。元興寺

はご存じのように国宝のお寺です。泰圓氏が修復して中興されました。民家に取り囲まれたお寺ですから、防災工事をしなければならなくなり、その過程で元興寺境内の発掘をしたところ、中世の庶民信仰の木製資料が大量に出土しました。それらを保存、修復していく必要に迫られたため、文化財の調査、研究をする中世庶民信仰資料調査室が作られました。これが今日の元興寺文化財研究所の前身です。ご住職は前向きで先進的な方でしたから、文化財の保存に合成樹脂を使えないとか、保存科学という当時では新しい研究分野も取り入れていこうという精力的なところがありました。そして一方では、そうした知識を持つ若い人たちを育てる必要を感じたのだと思います。

泰圓氏にはもうひとつ重要な事業がありました。それは福祉です。福祉も文化財も人材の活用をするためには、何より人作りが重要であるという思いを持っておられたようです。こうしたことが相俟って、奈良大学に文化財学科を創ろうと思立たれたのでしょう。

しかしかに理事長とは言え、泰圓氏が一人で考えてもできるわけではありません。元興寺の修復を通じて知り合った文部省（現・文部科学省）、東京国立文化財研究所（現・東京文化財研究所）、奈良国立文化財研究所（現・奈良文化財研究所）はじめ文化財関係の方々の助言を頂き、奈良は文化財を学ぶにはうってつけの環境だということになり、実現したわけです。

——奈良大学に文化財学科ができた10年ほどあと、1990年代に入ってから、多くの大学が文化財専門のコースを設けました。これは一種の風潮と言いますか、大学の経営上の戦略面が強いように思いますが、この風潮の前と後で、奈良大学として何か変化はありましたか？

西山先生：奈良大学の教育の基本的スタンスは何も変わっていません。従来、考古学なら史学科、美術ならば哲学科か史学科、保存科学であれば周辺科学に入るのだと思います。しかしあえて「文化財学科」という新しいジャンルを



西山先生（左）と学生たち

創り、学際的な教育として組み立てていくことを目指したのです。教員を見て頂ければ分かりますが、考古学、美術史、保存科学、文献史料等の専門家を集めています。この体制は、今も変わっていません（図1参照）。

また文化財を勉強するにはいろいろな視点を持つ必要があるというスタンスから、1年生では教養の中に少し文化財学が入り、2年ではもう少し広くなり、3、4年でゼミに属して専門的になります。他の大学の場合、学部からかなり専門的な内容になりますが、奈良大学はあえてそれをしていません。卒業時には不利なこともあるのですが、卒業後数年を経たときに、大学で得た広い知識がきっと生きてくるという信念を持っています。広く文化財を見ることのできる人材を育てていくというスタンスは、変わっていません。

——とても特色があると思ったのは、「文化財博物館学」というカリキュラムです。「博物館学」というのはあちこちの大学にあると思いますが、あえて「文化財」とつけているのは、何か狙いがあるのでしょうか？

西山先生：今は博物館の役割も広がっていて、野外博物館などもあります。考えてみますと、研究だけではなく、資料（文化財）を活用するという役割が大きくなっている

と思います。そうした現在の要請に応じた博物館を作りたいという思いがありました。

教員は山中一郎先生、^{やまなか いちろう}
泉拓良先生、^{いずみ たくら}植野浩三先生^{うえの こうそう}など、すでに博物館勤務の経験のある先生が担当してこられました。博物館学と文化財学を合体し、資料の活用にも資する人材を育てるという展望を持たせたいと思っています。まだ試行錯誤の段階ですが。

——博物館や美術館で保

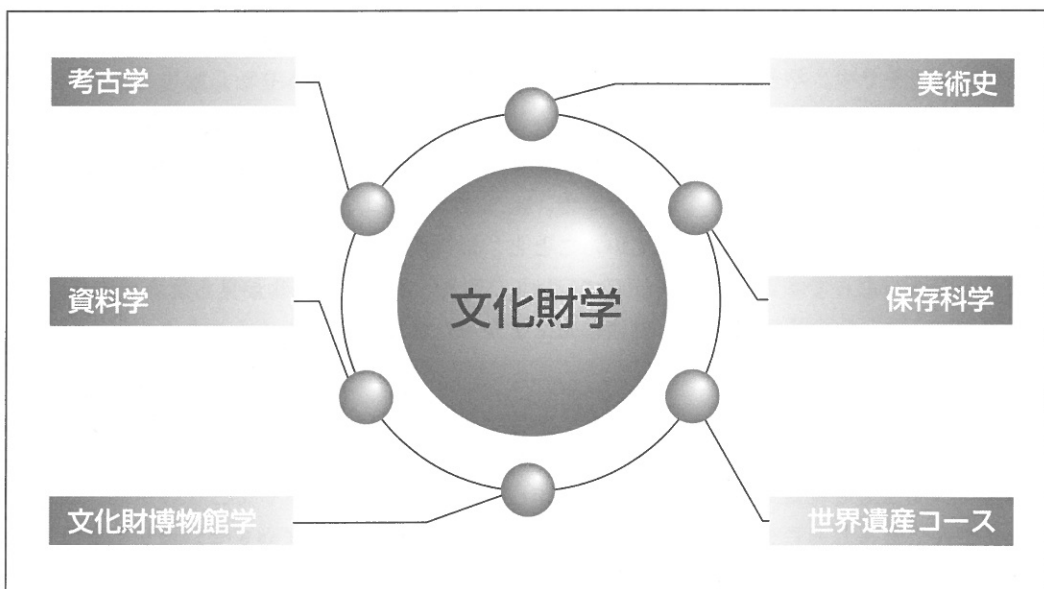


図1 奈良大学文化財学科の構成図

存担当のポストをふやしてもらえれば、文化財を学ぶ方々の就職先を増やせるのに、と、この分野の誰もが願っていると思います。学芸側と保存担当側は、資料の展示活用をめぐるどうしても対立構造になりがちで、そのため保存のポストが実現しにくいという事情もあるように思います。そこを打開する可能性もあるのでしょうか？

西山先生：難しい質問ですね。今、就職先が少ないのは事実です。

1980年代は、考古学の担当者が全国的に増えていく時期でした。バブル期（1980年代後半～1990年代）は埋文センターからの需要がありました。発掘すれば保存しなければなりません。都道府県市町村の教育委員会で人材を求めているので、今まで400人くらい奈良大学から送り出してきました。現在、全国のエデュケーション委員会の中で考古学担当者は4,000人くらいいると言われていますので、その一割が奈良大学の卒業生ということです。

しかし発掘調査の民営化が言われ出してから、教育委員会の採用がガタッと落ちました。採用期間も短くなりました。民間の発掘会社に就職する学生もいますが、民間企業はそもそも利益を上げることが目的なので、発掘調査に始めるのだろうか？と大学としては慎重に見ています。でも就職した学生は、限られた中でそれなりにがんばってくれています。我々の認識も少しずつ変わっています。

話を元に戻しますが、確かに就職のことを考えると、博物館に保存担当を置いてほしいと思います。日本文化財科学会は、全国の博物館には必ず保存担当のポストを設けてほしい、と文部省へ30年ほど働きかけてきましたが、実現には到らず5年ほど前に働きかけを止めました。民営化が進んで、文部科学省も動いてくれなくなりました。でもそういう動きを消してはいけません。希望は捨ててはいけませんね。

——あきらめないでください。。。

本物に触れる教育

聞けば文化財学科の学生数は、1学年100人ちょっと。大学院を合わせると、450人ほどになるそうです。バラエティに富んだ学生層の実例として、西山先生が美術専攻と考古学専攻の学生まで呼び出してくださり、インタビューに加わってもらいました。

——奈良大学を志望した動機をお聞かせ下さい。

美術史専攻学生：仏教美術を勉強したかったんです。だから京都か奈良の社寺が多い場所で学ぼうとしたとき、奈良大学にしか文化財学科がなかった。他の大学では美術科はあっても文化財学科としての広い視点がないので、奈良大学しかないと思いました。実際入ってみると、お寺や神社など行きたい所にすぐ行ける立地で、先生方も美術史だけでなく、文化財関係の先生がたくさんいらっしゃいますので、美術関係のことだけでなく、知りたいことがすぐに質問できるのがいいところです。図書館も充実しています。



インタビューに答えてくれた学生たち

保存科学専攻学生：文化財が豊富にある、幅広い分野の本物が身近にあるというのに惹かれました。

保存科学専攻学生：高校の先生に、「奈良大いいよ、すばらしいよ」と言われ、オープンキャンパスへ行ったときに、西山先生の「現物に触れるよ」という言葉が決め手となりました。

保存科学専攻学生：私は他大学の法学部で4年学び、一度社会人になって、公民館で地域の歴史体験ツアーなどの仕事をしていました。興味のある分野で仕事をしたいと思い、きちんと学び直そうと奈良大学を受験しました。面接の教官が西山先生と白石太郎先生だったのですが、このお二人の対照的な雰囲気惹かれて入学させていただきました。最初は考古学も美術史も史料学も保存も全部勉強できるということも魅力でした。1、2年生で学ぶ内、保存科学といっても理念的なことに興味が出てきました。

西山先生：彼女の場合、3回生にも編入できるし、大学院も受けられる。なんで最初から？と思ったのですが、結局1年生から入り、一から学んでいます。

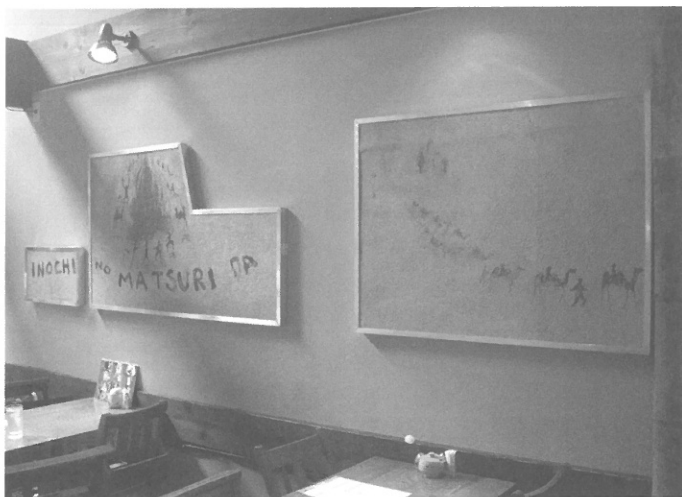
考古学専攻学生：私は仙台出身なのですが、博物館が大好きで、ある時鑑真和上像が仙台の博物館に展示されたのを見に行きますと、像なのに耳毛まで表現されていたのを発見したんです。それを見つけたとき、こんな細部まで造られているのかと、本当にびっくりしました。歴史も学びたかったし、博物館で働きたいというのもあり、学芸員資格の取れる大学を探しました。どうせなら歴史のある関西で勉強したいと考えたのが、奈良大学を選んだ理由です。

奈良大学に入ってみると、思った通り文化財まみれの授業でした。大学に入ってよかったことは、先生方が充実していることと、地理的にも、例えば平城宮などの史跡に自転車で行けることです。何より実物が見られるというのが、関西に来てよかったところです。

様々なフィールドワーク

——奈良公園で環境調査のフィールドワークをなさっていると伺いましたが。

西山先生：もう20年くらいやっています。大気汚染は文化財に悪影響を与えるので、その実態調査です。最終的な目的は、被害をいかに抑えるか、です。行政があまり興味を



故・河島英五さんの壁画。奈良大学での修復を経てTEN.TEN.CAFEに飾られている。

示さない部分ですが、だからといって放っておくわけにもいきません。もちろん学生も観測にいきますし、分析もします。最近の学生ははじめですから「授業がありますから」とあまり付き合ってくれません。「楽しいよ」と誘うのですけれどね。

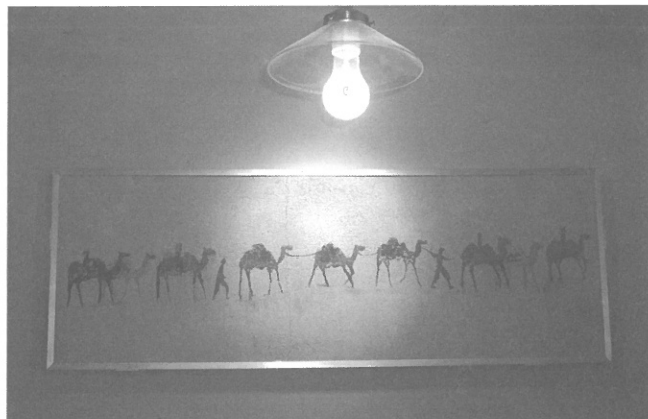
学生：授業で寝ているのだったら外へ出て行ったほうがずっと楽しいと思います。理解もし易いですし。

学生：大気汚染の調査に行くと、観光名所に装置を置いているので、東大寺や十輪院などに裏から入れたりするのが面白いです。実際に被害状況を見ながら説明してもらったりします。今まで観光でしか知らなかった奈良ですが、文化財の宝庫としてより身近に感じられます。また調査を20年も続けられたということですが、文化財は一時的に修復して保存するだけではなく、継続性が必要だということを頭ではなく気持ちの中からも納得がいきました。

ちなみに西山先生は、2004年からレバノンの地下墓の修復を行っており、学生も同行させています。その成果は奈良大学附属博物館で展示されました。

また、歌手の故・河島英五さんが、大阪法善寺横町で奥様が経営していた喫茶店の壁に描いた絵も修復したことがあるとのこと。火災で喫茶店が焼け、息子さんと奥様が被災した絵をなんとか救いたいと相談にこられ、大学で保存処置を引き受けました。処置が終わった絵は現在、奥様が奈良町（ならまち）に開いた「TEN.TEN.CAFE」というカフェに飾ってあります（写真）。

「決して文化財といえるものではないかもしれませんが、河島英五はゆったりとした時間を好み、テレビ出演はあまりせずに、時間があればアフガニスタンなどを旅してキャラバンの所へ行ったりしていました。そのゆったりした時間というメッセージを絵にしたのです。それはそれで大事なものであるのではないでしょうか。文化財の保存というのは国宝や重要文化財ばかりが対象ではなく、今の時代を映し取っているものも大事にしていくことも必要だと思います」と、西山先生。



また美術史専攻へも、今から5～6年前、お寺の床下に寝かせてあった金剛力士像二体（像高282.6cm、308.8cm）が持ち込まれたことがありました。所有者が奈良大学の光森正士教授で、展示できる状態にしたいという相談だったため、保存科学の学生とも話し合い、協同で修理に当たることになりました。半年間、学外の仏像修理の専門家を週2～3日招いて指導を仰ぎ、美術史と保存科学の20名ほどの学生で樹脂含浸を行ったそうです。この像は現在、大学の図書館に堂々と展示されています。

西山先生：あの仁王像は自慢だよ。

保存科学の存在意義というのは、文化財の保存のみではなく、さまざまな調査にも関わっていくことです。確かに保存科学という学問領域は存在しますが、そこで周りとは関係ないというのではダメです。保存科学は文化財学の中の一つの車輪です。たとえば美術史や考古学は昔からある一つのジャンルですから一本立ちでやっていける学問ですよ。これに対し保存科学は、いろいろなジャンルと連携しなくてはならないという意識を常に持っています。

扉は開かれている

夕刻遅くインタビューを終え、保存科学実習室を見せていただくことになりました。

普段なら誰もいないであろう時間帯ですが、10名くらいの学生さんたちが作業中です。見ると保存処置の終わった鉄製の埋蔵文化財を組み立てる作業中。

楽しそうに作業している学生に聞いてみると「私は1回

生なのですが、こんなに早く実物を触られるとは……。うれしくて仕方ないんです」……満面の笑みが印象的でした。院生：ここはやる気のある学生ならば学年、学科に関係なく常に開かれています。ここに来て楽しいと思った学生は、その気になればどんどん学んでいけます。逆にこの二重扉を開けて入って来られない学生は、それまでです。この大学はそれほど自由なんです。

考古実習室を覗くと、ここでも自主的に勉強する姿がありました。

あらゆる教育現場で管理が進む昨今、このように学生の自主性を尊重してくれる大学も珍しいのではないかと思います。いい意味で古典的な大学の気風が残っていると言えるのではないのでしょうか。

取材を終えてみると、学生たちが自分の研究領域を超えて「文化財」に接する姿が印象に残りました。学科の先生



放課後に作業を進める学生たち

方が他の領域に興味を持って研究し、お互いに同じスタンスで文化財に向かう姿勢が、うまく学生たちに伝播しているのだと思われます。奈良という立地条件もさることながら、やはり30年という伝統が息づいていると感じました。

—了— (R.S.)

書・籍・紹・介

『水損資料を救う』 風水害からの歴史資料保全



松下正和 河野未央 編
岩田書院
2009年5月発行
定価 1,600円＋税
160ページ A5判

表紙の写真は、台風の浸水被害のため、みそ蔵で泥だらけになった古文書です。災害に遭ってしまったとき、先祖代々受け継いできたもの、家族などの思い出のものが被災したら、どうするだろうか。被災したものは、生活復旧する中で、諦めて廃棄してしまうことが多かったりします。ようやく落ち着きを取り戻した時に、失ったものの大きさに虚無感に苛まれる方が少なからずいることを聞いたことがあります。

この本は、歴史資料ネットワーク（略称「史料ネット」）が、豪雨や台風などによる水害を受けた史料の救済についてのシンポジウム内容や活動内容をまとめたものです。

史料ネットとは、1995年の阪神・淡路大震災を契機に、関西の歴史系の研究者を中心として被災地の行政・住民が共に、被災史料（とりわけ指定文化財以外の民間所在史料）の保全活動を行ってきたボランティア団体です。当初の史

料ネットの活動は、地震災害からの被災史料の救出が主だったのですが、2004年の風水害の多発をきっかけに、水害にあった史料の救助を行うことになったそうです。その時の事例が表紙の写真です。みそ蔵の汚損した古文書を見たときは史料ネットの方々もかなり困惑したそうです。

震災は現場からの史料の救出が重要になりますが、水害は泥水などにより汚損されているので、カビや腐敗など発生を防ぐために早急な乾燥処置などの対応が迫られます。

本には、そのときの救出から乾燥処置や修復に至る奮闘や失敗、問題点などの試行錯誤が率直に書かれています。

そして、実は史料ネットの保全活動から日本の抱えている現状が垣間見えます。過疎化による、地域の文化遺産、歴史遺産が失われつつある現実や、保全活動を行うための文化財に係わる人材や資金不足、ボランティアで参加している方々の就職事情などなどと、日本の社会の歪みが見えてきます。

被災が起こったことで、地域の文化歴史遺産の消失の危機が浮き彫りになりますが、すでに日常から文化継承の危機は進行している現状が、実は身近にあるわけです。この現状をどうすればよいのか。

ぜひ、読んでほしい一冊です。史料ネットの保全活動の取り組みを知って欲しいことと、私たちの先人らが育んできた文化を遺すためにはどうすればよいのか考える糸口にして欲しいと思います。

みそ蔵で被災した古文書は、多くの方々の協力と熱意で乾燥処置と修復が終了して読むことができるようになりました。史料ネットでは、被災したときに、濡れたから汚れたから壊れたからと、あきらめて処分しないで欲しいと訴えています。本の最後に参考資料として、被災文書の救済のマニュアルが掲載されています。

(K.M)

ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵 「マゼランチェスト」の保存修復プロジェクト

— 漆製品修復における日本と英国技術者の共同作業 —



マゼランチェスト
(C) Image Courtesy of
the Victoria and Albert
Museum, London

山下 好彦 (漆文化財修復)

マゼランチェストは、1630年代後半に日本の京都で製作され、ヨーロッパ向けに輸出された漆器で、ルイ14世の側近だったマゼラン家に所蔵されていたものです。現在、ロンドンのV&A美術館に収蔵され、同館のコレクションの中でも世界的な名品のひとつとなっています。形状や文様は日本の古典をベースとしながらも、東洋と西洋を融合させた大変エキゾチックなものとなっています。

2005年4月、V&A美術館は、ゲッティ財団と東芝国際交流財団の助成金を得て、この名品の保存修復プロジェクトを発足させました。

当機構の会員山下好彦氏は、漆文化財修復専門家として世界的に知られています。今回のプロジェクトでは、V&A美術館の修復専門家として招かれ、家具修復に従事している専門職員のShayne Rivers (シャイン・リバーズ) 氏と共に修復作業に当たりました。

漆工文化財の扱いについては、可逆性を金科玉条とする西欧の手法と、時には不可逆的素材を用いて伝世品を守り伝えてきた日本の技術との、考え方の差違を示す典型的な例として、今までたびたび議論的的となってきました。今回のプロジェクトは、西欧と日本、両方の保存修復に関する価値観を取り入れて、日本製漆工文化財の保存修復において、新しい取り組み方を展開させるという企図を含んでいます。この目論見はうまくいったのでしょうか？

山下氏に、プロジェクトの様子をインタビューしました。

Q1：プロジェクト開始にあたり、心がけたことはありますか？

とにかく西洋の材料や技法について既成概念にとらわれないようにしました。その上で、日本の修理の良さを何とか理解していただけるように心がけました。

Q2：リバーズ氏とのコラボレーションの中で、苦労されたこと、逆に有益であったことは何ですか？

日本では作業は見て覚え、体験して技法を習得するとい

う部分が少なからずあります。しかし、氏は材料や技法について理論上で理解するのを最優先させるため、説明することに大変な苦勞をしました。逆に、さまざまなことに対して対話する中で日本の材料や技法を理解してもらうための要点が明確になったことは非常に有益でした。

Q3：所有者であるV&A美術館との意思疎通はうまくいきましたか？

ある程度うまくいったと思っています。プロジェクトリーダーに日本文化と言語に精通しておられるRupert Faulkner氏がおり、私の至らない部分を補っていただきました。

Q4：イギリスで作業をする中で、日本と一番違うと感じられたことは何ですか？

やはり修理が可逆的であるのかということです。日本では可逆的であることよりも質感に重点を置き、イギリスではやり直すことができる修理を最優先としています。そこで問題になるのが可逆的な材料を使用しても可逆的な修理にならない場合があるという矛盾です。今後さまざまな機会に対話を続けていく必要を感じています。

Q5：プロジェクトを終えて、感じたことと、今後の課題などを教えてください。

日本の修復技術や材料について多角的に調査研究が行われた結果、劣化漆塗膜の補強に漆を用いる技法がはじめて西洋で理解され、大きなハードルを越えることができたと感じています。私は今年、ICROM国際研修の講師をしておりますが、日本の漆工修復技術を学びたいとのニーズは高まっているのは間違いありません。今後は、国内外を含めていかに人材育成に取り組んでいくのが大きな課題と言えましょう。

——ありがとうございました。

※ちなみにこの「マゼランチェスト」は、J・ポール・ゲッティ美術館が2009年3月3日から5月24日まで開催した「沃懸地の物語：ヨーロッパのコレクター向けに作られた日本漆器」展の中心をなす作品として出品されました。

期間中の5月23日には、ゲッティ美術館レクチャーホールにおいて、山下氏の講演会が行われました。

※マゼランチェストについての解説は、The Paul Getty Museum のホームページを参照しています。

■第17回 芸工展2009「修復のお仕事展 ～伝えるもの・想い～」に参加します！

芸工展とは、東京・谷中地区を活性化させる取り組みのひとつとして平成5年に始まった地域のイベントです。谷中・根津・千駄木・日暮里・上野桜木・池之端界隈で「まちじゅうが展示会場」と銘打って、地域に暮らす人々が様々な企画展示・イベント等を行います。

(芸工展URL: <http://www.geikoten.net>)

JCPも池之端に事務局を移して早や3年目、この地域を拠点とする文化財関連の仲間と一緒に、修復に関わる仕事の紹介展示に協力します。

お近くの皆様、是非会期中にお立ち寄りください。

会 期：2009年10月10日(土)～18日(日)

会 場：ギャラリーゆり音 〒113-0031 文京区根津2-19-8

開催時間：11:00～18:00

参加者／分野：

伝世舎(三浦功美子・嶋根隆一)／東洋書画修復

(株)パレット(長谷川雅啓)／保存修復品製造販売

文化財保存支援機構(八木、松本)／保存修復支援

武蔵野文化財修復研究所(石原道知)／埋蔵文化財修復

もば建築文化研究所(中村文美・梅田太一)

／建造物保存活用

武田恵理・増田久美・中右恵理子／油絵修復

山崎真紀子／染織品修復

山田祐子／東洋画修復・模写

※上記の殆どが、JCPの会員です。

※土・日・祭日には「香笛神社(カフェ・ジンジャ)が開店します！

※この展示会の企画・立案は伝世舎が主宰となって行っています。



日本ケンタッキー・フライド・チキン株式会社所有「カーネル・サンダース像」保存事業が、「朝日小学生新聞」で紹介されました。

今を去ること24年前、阪神タイガースが優勝した折に興奮した阪神ファンが大阪道頓堀川に投げ入れ、今年3月に引き揚げられた日本ケンタッキー・フライド・チキン(JKFC)社のカーネル・サンダース像。同社から保存修復処置の依頼を受けた当機構は、「文化財」としての処置を条件にお受けしました。

6月25日に「補修なった」カーネル像が、JKFC社の神事で大阪住吉神社においてお披露目された前後は、マスコミ各社からの取材の電話がひっきりなしでした。

中でも小学生向けに記事を書いたのが「朝日小学生新聞」です。

「身の回りで大切にしたいものはなんですか？」記者のこの質問から、ものを大切にする心、文化財を愛する気持ちを持った子供が育ってくれたらすてきです。

24年間川底で耐えてくれたカーネルさんにも感謝！！

※JKFC社では、カーネル像の復活を記念して「おかえりカーネルストラップ」を製作、8月から各地の店舗で販売しています。売り上げはすべて「国連世界食糧計画」の支援活動に寄附されます。

同社HP

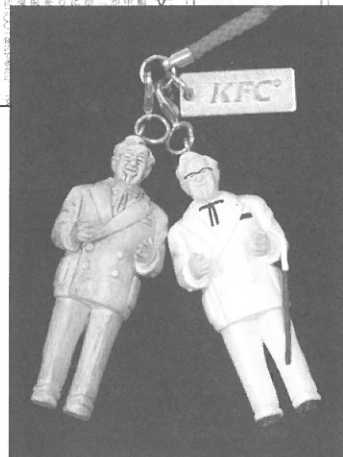
<http://japan.kfc.co.jp/news/news090625kfc02.html>

をご参照下さい。



「朝日小学生新聞」
(2009年7月13日)より

おかえりカーネルストラップ
(左が保存処置後を模したもの・
右が川に投げ込まれる前の姿)



関連団体イベント案内

■ 第3回 文化財サポーターフォーラム～未来へつなげる 保存・活用～

◎主催：文化庁

◎日程／会場：

2009年10月3日（土）／コクヨホール

（東京都港区港南1-8-35）

2009年11月1日（日）／国立文楽劇場小ホール

（大阪市中央区日本橋1-12-10）

◎講演会：13：00～17：00

◎ポスター発表：全国各地の保存団体・市民団体・NPO法人等の活動内容に関するポスター発表を行います。

◎定 員：東京会場；300名／大阪会場；150名

◎参加申込方法：①氏名 ②所属 ③住所 ④電話・FAX
番号 ⑤E-Mailアドレス（ある場合） ⑥今後の関連イ
ベント案内希望の有無

を記入の上、FAX、はがき、E-mailにて下記事務局まで
第3回文化財サポーターフォーラム事務局：

株式会社ザ・コンベンション内

〒107-0061 港区北青山二丁目7-9 日昭ビル6階

TEL：03-3423-4180 FAX：03-3423-4108

E-Mail：bunkazai-forum09@the-convention.co.jp

◎詳細は、

URL：http://www.the-convention.co.jp/bunkazai-supporter/

■第3回資料保存シンポジウム

「資料保存を实践する－事例から学ぶ現場の知恵－」

◎情報保存研究会（JHK）・（社）日本図書館協会 共催

◎日 時：2009年10月16日（金）

10：00～17：30（受付9：30）

◎参加費：無料

◎申し込み切：10月9日

◎会 場：江戸東京博物館1階ホール

（〒130-0015 墨田区横綱1-4-1 TEL：03-3626-9974）

※JR総武線両国駅徒歩3分

◎内 容：被災資料の救出や映像資料の保存、デポジ
トライブラリーの活動などの報告

◎後 援：

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会・国立大学図書館
協会・私立大学図書館協会・文化財保存修復学会・
ARMA東京支部・企業史料協議会・記録管理学会・全
国大学史資料協議会・日本アーカイブズ学会・専門図書館
協議会・アート・ドキュメンテーション学会（一部申請
中）

◎申し込み：①氏名 ②所属 ③連絡先電話番号またはE-
Mailアドレス を記入の上、下記事務局へ。

情報保存研究会（JHK）事務局

〒113-0033 文京区本郷1-14-2-71

E-Mail：sympo@e-jhk.com FAX：03-5976-5462

URL：http://www.e-jhk.com

■平成21年度 画像保存セミナー

◎主 催：社団法人 日本写真学会

◎協 賛：日本写真芸術学会／一般社団法人 文化財保存
修復学会／財団法人 日本博物館協会／東京都写真美術館

◎日 時：2009年10月30日（金）9：50～17：00（9：30受
付開始）

◎場 所：東京都写真美術館ホール

（目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内）

◎セミナー参加費：

日本写真学会および協賛学協会会員 6,000円

非会員 8,000円

学 生 2,000円

◎定 員：180名

◎申込締切：2009年10月9日

◎申し込み方法等詳細は、日本写真学会ホームページ：

http://www.spstj.org/

あるいは、下記事務局へお問い合わせください。

社団法人 日本写真学会 事務局

〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5 東京工芸大学内

Tel. 03-3373-0724 Fax. 03-3299-5887

■第33回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会

「日本絵画の修復－先端と伝統－」

◎主 催：東京文化財研究所

◎日 時：2009年11月12日（木）～14日（土）

◎会 場：東京国立博物館 大講堂

◎内 容：

11月12日（木）「日本絵画の修復の現状」

11月13日（金）「修復技術と材料」

11月14日（土）「修復と自然科学」「総括」

◎参加費：一般 9,000円、学生 3,000円

※懇親会：2009年11月12日（木）17：30～19：30

一般登録者は招待。学生は別途4,000円

◎参加申込：要事前登録

インターネットホームページから登録フォームをダウン
ロードして、郵送、FAX、E-Mailで、下記事務局まで返信
のこと。

※申込締切：10月18日

東京文化財研究所 保存修復科学センター

〒110-8713 台東区上野公園13-43

TEL：03-3823-4922／FAX：03-3823-4835

E-Mail：symposium2009@toibunken.go.jp

URL：http://www.toibunken.go.jp/~shufuku/sympo2009

ご入会ありがとうございました。

(平成21年3月1日現在入会者数)

■理事	8名	■維持会員	10名
■登録会員	169名	■一般会員	85名
■学生会員	44名		
■監事	1名		
■専門評価委員	1名		
■評議員	1名		
■賛助会員	31件		
株式会社	宇佐美松鶴堂		
株式会社	宇佐美修徳堂		
株式会社	岡墨光堂		
株式会社	桂文化財修理工房		
財団法人	元興寺文化財研究所		
京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター		
株式会社	京都科学		
共同精版印刷株式会社			
共和コンクリート工業株式会社			
国富株式会社	長崎営業所		
株式会社	芸匠		
株式会社	光影堂		
一般社団法人	国宝修理装こう師連盟		
株式会社	坂田墨珠堂		
株式会社	修美		
宗教法人	正法院		
中部資材株式会社			
株式会社	東都文化財保存研究所		
日本通運株式会社	美術品事業部		
株式会社	半田九清堂		
長谷川 聡			
百元 節			
株式会社	フレンドトラベル		
株式会社	文化財修復技術研究所		
株式会社	文化財保存		
溝川商店			
山領絵画修復工房			
他 個人3名			
(アイウエオ順)			

NPO JCPの活動に

参加してみませんか？

■登録会員：年会費 7,000円

文化財保存に関わる専門的スキルを持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員：年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する個人。

■賛助会員：年会費 一口50,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員：年会費 3,000円

大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典 ・季刊情報誌の送付

・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。お返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL. 03-6770-1682 FAX. 03-6770-1683

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

・三菱東京UFJ銀行 四谷三丁目支店

普通預金 3960340

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店

普通預金 1727893

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS

第20号

2009年9月30日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端103号

TEL: 03-6770-1682 FAX: 03-6770-1683

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

関西支部

京都造形芸術大学

日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL: 075-334-8450

〈理事〉

三輪 嘉六 (理事長)

大林 賢太郎 (副理事長) 西浦 忠輝 (副理事長)

伊原 恵司 白井 久明 増澤 文武

荒木 伸介 澤田 正昭

〈本部事務局〉

八木 三香 (事務局長) 松本 洋子

〈関西支部事務局〉

伊達 仁美 (事務局長) 加藤 亜沙子

〈編集協力〉

嶋根 隆一 (伝世舎)